



森で出会えば…

～野山で感じるつながり記録～

田中 千晶

自然に触れるということ

滋賀県の田舎で育った私にとって自然に触れる、自然の中で遊ぶことはなにも特別なことではありませんでした。春には桜のはなびらを笛にして、ご機嫌に登下校し、夏は朝から夕方まで川遊び。地元は名水の地として有名なので、川に網を入れるだけでマスと出会うことができました。秋にはポケットいっぱいにどんぐりや木の枝を拾っては秘密基地に隠し、冬は大人が屋根から雪を降ろし、落とした雪の山を使ってかまくら作り。祖父に連れられ初めて二階の屋根に上った時は、膝まで積もった雪に足を取られ、身ごと落ちそうな感じがして、内臓がヒュッとなったことを覚えています。四季折々の自然と触れることで五感をフル活用できる幼少期を過ごしました。思春期以降も自然に抱かれることで心安らぐことが多く、嫌なことがあった時にはその気持ちを洗いながすように溪流に足を入れたり、なんだか心が晴れない日や嘔みしめたいようないいことがあった日はあえて遠回りして、林道や農道から帰ったり…恵まれた自然環境に精神面を育てられたと大いに感じています

そのおかげもあってか、保育現場で働いていた時はありがたいことに「外遊びといえど…」で子どもたちから常に名前があがる存在でした。春の草花を見るだ

けで体が勝手に花冠を編んでいること、どの枝に乗ると折れないか、体感で分りながら木に登ることは日常。自然物を取り入れた遊びを考える時の頭の冴え方は自分でも「天性ものだなあ…」と感ずることがありました。原体験として自然の中で遊んだ経験がいつまでも生きていることをビビッと感ずる日々でした。



↑3歳児3月 お雛様の制作

山で見つけた素材でその場で作ったら最高やん！

「森のようちえん」との出会い

公立園に勤務していたので、毎春人事異動がありました。私の人事異動は1年目、山間地域の小規模園に異動が決まりました。当時の園長先生に・移動先の園は「山の日」があること・森のようちえん、自然保育を保育方針としていることを伝えられ。「きっと先生の良さを発揮できる。」と太鼓判を押されたことを覚

えています。初めての異動にハラハラしつつも、なんだか自分の強みを発揮できるのかもしれないという淡い期待も出てきました。しかし、「森のようちえん」って、「自然保育」って、そんな小手先のものではなかったと知るのです。

そもそも…

「森のようちえん」って

これに関しては語りだすと本当に長くなり、これだけで連載1回分の量になってしまいそうなので今回は概要を大まかに。森の幼稚園 (Wald Kindegarten) とは、発祥は1954年デンマークとされ、その後ドイツや北欧に広まったと言われています。身近な自然環境の中、必要最低限の援助で保育を行い、子どもの主体性やありのままの受容を重視する方針の乳幼児教育の【概念】を指します。園名や園の種類のことを指すわけではないので、文部科学省に規定に沿った幼稚園だけでなく、保育園、学童保育、自然学校などその理念を用いる機関を「森のようちえん」と平仮名表記で呼びます。日本では2008年に「森のようちえん全国ネットワーク連盟」が設立されました。

勤務園で自然保育の講師としてお世話になっていたのは、滋賀県内の森のようちえん「せた♪森のようちえん」代表の「さいちゃん」こと西澤彩木さん。(森のようちえんでは大人を先生とは呼ばない団体が多く、大人と子どもの心理的距離の近さも魅力のひとつです。) 森のようちえんにおける大人のかかわりの要点についてさいちゃんは「子どもたちが主体的に活動できるように、自ら感じて考えて体験できる場を整え、任せながら見守ること」と著者で述べます。(2019) また、様々な森のようちえん界限(〇〇界限って若者言葉…?)のバイブルといえる本がレイチェル・カーソンの「センスオブワンダー」(1996)『知る』ことは『感じる』ことの半分も重要ではな

い。」とあるように森の中では大人が子どもに何かを「教える」ことはなく、子どもの興味、関心に合わせて必要なことだけを伝える程度。さいちゃんは子どもを見守る大人のスタンスについて「お口はチャック、手は後ろ、耳はダンボ」と伝えてくれました。

森ようって哲学…

そんなこんなで、森のようちえんの保育及び自然保育で大切なのは自然を活用して「どう遊ぶか」だけでなく、自然の中でどのように子どもと関わるか、見立てるか、見守るか…保育者として大人としてどんなことを感じるかという哲学的な姿勢であることに気が付いた時にはもう「森のようちえん沼」にズブズブズブ…さまざまな森ように行き、子どもと、森と、大人と出会い、プレイパークのスタッフにもなり、仲間にも恵まれ…2023年からは滋賀県湖北にて自主保育型森のようちえんの立ち上げスタッフとなり、今も細々と活動しています。



↑滋賀県 長浜市(浅井)のプレイパーク

雪の重みで倒れた竹のトンネル、姉妹で雪道大冒険。

「危ないよ!」と大人は止めません。

森で出会えば…

初めて森のようちえんに見学に行ったときに衝撃だったのが子どもと大人の関係性。子どもたちはスタッフを先生と呼びません。せた森で小学生数名に取り囲まれ「なんてよんだらいいの?」と問わ

れたとき、何も思い浮かばなかった私。「苗字は田中なんよね～」と何気なく言うと「たなかって…タピオカやなあ！」とケラケラ言われて唾然…（笑）以降、森で活動する際には「たびちゃん」と呼ばれています。（「タピオカ～!!」と突っかかってくる小学生が毎年数名いますが…かわいいものです。）

個人的保育理念に「私は『先生』という職種なだけであって、子どもとは常に対等でいたい。クラスの仲間の一員でありたい、お友達のひとりでありたい。」という思いが強くありました。幼児期後期の子どもたちと接していると、自然を取り入れた保育でなくても、共通の目標を達成したり、食、住など生活場面を共にしたりする中で仲間として認められる感覚を得ることがあります。しかし、乳児期の子どもたちと接するなかではどうしても養育者のポジションから抜け出せない感覚がありました。

また、小さな田舎町で保育をしていたので保護者の方との関係性にも軸を持ちたいと思い働いて居ました。持ち上がりやきょうだい、いとこを担任するのが珍しいので、フランクになりすぎず、でも固すぎるのも…という葛藤がありました。

森のようちえんでは、保護者も保育スタッフとして入る団体が多くあります。「〇ちゃんのお父さん、お母さん」ではなく保護者も貴重な1人のスタッフ。一緒に子どもを見守る一員として過ごしていると自然と名前やニックネームで呼びあえる仲になれる感覚に魅力を感じました。これは、「預ける側」「預かる側」の関係があたりまえになっている既存の園生活では得られにくい感覚で、「なるほど…こんな関係性もありなのか…」と新鮮な学びでした。

森で出会えば、肩書、キャリア関係なくフランクにフラットに関わることができる。その際「子どものために…」とい

う大切にしたいポリシーを十分共通理解できているので大人同士が自然な形でリスペクトしあえる。誰が教える側でも誰が教えられる側でもない。同じ目線で対等に語り合う中で自然と支えあい、気づきあうことができる。「森で出会えば…」こんな関係性で人とかわることができるのです。

みんなでもあるくこどもを育てるような、広く温かいコミュニティの中で自分を見つめることができるような…森で会うから見えてくる対人関係について連載していけたらと思います。よろしくお願ひします。



【参考文献】

金子龍太郎・西澤彩木(2019)『森のようちえんの遊びと学び 保育・幼児教育の原点ナチュラルキンダーガーデン』かもがわ出版